

宝彩有菜のエッセイ講座

【第1回】 テキスト (目次)

【第1回】 さあ、エッセイを書いてみよう

日常はすべてエッセイ

自分が何を考えて何を感じているかチェック／同じことを考えていると目は曇る
／クリアーな視点を得るには

書くことの楽しさ

自分との対話／書くことはしっかり考える道具
／良い書き方をすれば自分が成長する

原稿作成

原稿用紙・ワープロ／縦書き横書き／パソコンでの校正チェック

辞書の使い方

国語辞典／漢和辞典／広辞苑／電子辞書

長編も最初の一行から

長編に挑戦する場合／1000文字の文章が書ければ長編も書ける

タイトルのつけ方

結論が先に見える場合の良否／疑問形ではじまるタイトル
／内容の要約と一ひねり

自分の言葉で書く

話し言葉と書き言葉／みんなに向かってかくのではなく、誰かに向かって書く

他人のことはあれこれ言わない

紹介文とエッセイとの違い／アピールするのは自分

一文の長さの問題

読点から読点までの長さ／段落との関係

【第1回】 テキスト (本文)

さあ、エッセイを書いてみよう

【101】 日常はすべてエッセイ

(自分が何を考えて何を感じているかチェック)

エッセイは、長編小説でもありませんし、日記でもありません。ですから、何かを想像して、その世界に入っていくというものでもありませんし、日記のように、自分にとっての記録が主体というものでもありません。

エッセイとは、「自分」が考えたり、感じたりしたことを、自分も含めた、他の人に伝えるということです。ですから、「自分」が必ず入っています。個性のある「自分」がエッセイの中に入って

いませんと、それは、レポートとか、記事になってしまいます。

逆にレポートの中に、「自分」が入っている、つまり、「自分の気持ち」や「自分の考え」が入っていると、それはレポートとは言わないで、エッセイと言うべきものになってくるのでしょうか。

また、エッセイは、その短い文章の中で、一つのテーマが完結しているのが特徴です。長い小説の一部分を取り出して読んでも、何が言いたいのかわかりませんが、エッセイは、その短い文章の中に、テーマがあって、しかも、そのテーマがその中で終わっています。余韻が無いという意味ではなくて、余韻はあった方がいいのですが、とにかくその文章が終了しているということです。作者はその文章で、言いたいことを、言い得ているということです。

さて、このように考えていきますと、エッセイを書くと言うことは、つまりは、「自分」を書くことになります。一つの花を見て、その花の描写をするだけではなく、その花に対して自分がどう感じているのか、何を思うのか、何を思い出すのか、そのような自分の心の動きを文章にして書き出していくことになります。

そこで、「ああ、私は、あまり日常に感動することがないから、エッセイはなかなか書けないわ。もっと感動的な人生ならエッセイも書けるのに」と思う方がいるかもしれませんが、それは、アプローチが逆です。

ビックリしたこと、驚いたことがあれば、エッセイが書けるものではありません。

もちろん、そのようなことがあれば、エッセイを書くのは簡単かもしれませんが、本当は、そうではなくて、エッセイを書くことによって、自分の「感性」や「思考」を掘り出していくことに、エッセイを書く意味があるのです。

「自分」の心は、毎日すさまじく働いています。動いています。でも、日頃は、それに気が付きません。変化に乏しい慣れた毎日をおっていたり、逆に、とても、忙しい毎日だったりすると、自分自身を振り返る余裕があまり無いですから、感動したり、考えたりすることも少なくなっているように思います。しかし、実際は、頭は、超高速でいろいろなことを感じたり、考えたりしています。

エッセイを書くと言うことは、その頭の働きをゆっくり観察するということになります。スローモーションで再現して見るようなものです。

例えば、毎日急いで通過する駅の改札というテーマでエッセイを書くとします。

紙を前にして、あるいは、パソコンの前に座って、静かに思い出してみる。考えてみる。

すると、そのときの情景が、映画のように思い出されてきませんか。改札を通過する、そのわずか、10秒に起こった自分の感情や考えが、あるいは、動作までも、あれこれと心の中にイメージされてきませんか。一番最初にこのこの駅に着いて、その改札を通ったのは、いったいいつだったでしょう。20年前？ その日のことが思い出されるかもしれませんね。そのことを、たった一行でもエッセイの中に入れて、わずか10秒間の描写の中に、20年の歳月が遠近法のように奥に入ってきます。ぐっと奥行きがでます。

そのような方法で、「毎日通る、駅の改札」という1編のエッセイを作成することも可能です。

このような意味で、日常見慣れた風景でも、出来事でも、家事でも何でも、すべて良いエッセイ

の素材になります。

というか、エッセイを書けば、日常が、すべて、どんなことでも、とても味わい深いものになっていきます。

なんでもない、日常が、エッセイという、豊かな「文学」の対象に変わっていくということでもあります。

日常をすべてエッセイにする。そのつもりで、まずは観察してみてください。

(同じことを考えていると目は曇る)

考える力や、感じる力が衰えていると、なかなか良いエッセイが書けないと思う場合もありますね。

でも、大方は、自分で、自分の力を浪費しているわけですから、浪費を解消すれば良いのです。例えば、思考が「堂々巡り」になっていると、だんだん考える力がなくなってきます。

「だから、堂々巡りが止まれば、エッセイを書きましょう。とにかく今はエッセイどころではなくて、堂々巡りをとめることが先決です」と「頭」は思うかもしれませんが、そんなときこそエッセイを書いてみましょう。

エッセイを書くとき、エッセイの文章の上で、「堂々巡り」はできません。同じ事を何度も繰り返して書くということは、面倒でとてもできないことです。また、作品としても、同じことが何度も書いてあると、上等とはいえません。

とにかく、文章にして書くと言うことは、自分がもし、堂々巡りとか、同じ心配とかを頭の中で繰り返していたとしても、それが紙面や画面にはっきり現れますから、それが堂々巡りであることに気付くことができます。

自分の考えの軌跡を、文章にするわけですから、「堂々巡り」なら、文章も「堂々巡り」になりそうですが、そうはなりません。

自分から外に出た文章を、自分は、客観的に読んでいるからです。当たり前のことなのですが、繰り返しはしません。この効果は絶大です。効果というのは、「堂々巡り」が止まると言う効果です。

ちなみに、思考の「堂々巡り」は、エンジンの「空回り」と同じで、エネルギーを大量に消費する割には、前に進みません。疲労するだけになります。

エッセイを書けば、それがとまるのであれば、これほど簡単な解消方法はないですね。

(クリアーな視点を得るには)

たとえば、「堂々巡り」が終われば、優秀な頭はまた、他の案件を考えることができます。思考に余裕ができます。つまり、心の目がクリアーになってくるということです。

もし、エッセイがうまく書けない。なんだか筆が進まない。気分が重い。という状況があったら、

チャンスです。その気分が暗くなっていることについて、さっそく、そのテーマで一つエッセイを書いてみるべきです。

たぶん、たくさんの思いが詰まっているように感じているかもしれませんが、文章にしてみると、割と単純なことかもしれません。あれもこれも、あれもこれも、と「頭」で考えていたときは10も20も考えるべきことがあるような案件でも、文章に書いてみると、たったの3つとか、4つとかになることもあります。「頭」はもともと同時に2つ以上のことを考えられませんから、「頭」のなかで、3つ以上の要件を回して考えていると、それは、10にも20にも思えるわけです。実際に紙に書いてみると、たったの3つと言う場合も実はたくさんあります。

また、紙に書き出してみると、それを客観的にみることができまから、「なんだ、あんなに、悩んでいたのに、こんなことか」と自分で自分を楽にすることができます。

これは、エッセイという、他の人に読んで貰うというスタンスに立って、自分の問題を書くという作業をするために、すぐにその効果が現れてくるのです。一言でいえば、自分を客観的に見れるということです。どんなことも客観的に見えるようになってくると、物事に対するクリアーな視点が獲得されてきます。

そのクリアーな視点に添えて、自分の「心」が入っていれば、それはもう特上のエッセイになるわけです。ですから、自分が悩み苦しんでいることもかまわず積極的にエッセイという文章にしてみましよう。

【102】 書くことの楽しさ

(自分との対話)

自分で書いたエッセイを、人に読んで貰ったり、後日、自分で読み返したりすることも確かにとても楽しいことですが、本当は、「書いている時が一番楽しい」のです。

今回は、それをお話しします。

普通、人間はものを考えるときは、自分の頭の中で「思考」します。ところが、「思考」は痕跡が残らないので、あちこちに飛んで行きがちですし、また、痕跡がのこらないので、どこまで「思考」が遠くに行ったのか自分でもわかりません。

すると、思考は、まるで、紐が切れたタコのように、風に吹かれて宙を舞うということになります。

そのような、思考をしているときは、確かにいろいろなことを思ったりしますが、生産性のあるようなことを思うことは少ないですね。ただ、頭の中は結構忙しいですけど。

(書くことはしっかり考える道具)

さて、エッセイを書くとなると、目の前に、自分の文章が綴られていきますから、目はそれを繰り返し読みます。読むと、頭もそのセンテンスを理解して次を考えます。そして、その次を書く。それを読む。次を考えてそれを書く。という作業になります。

これは、先ほどのタコの例でいうと、ちゃんと、紐を引っ張ってコントロールしているというこ

とです。考えることについての支配権を自分が握っていると言ってもいいです。

文章を書いているときは、ですから、心が落ち着いて静かになります。

しーんとしてきます。自分が、自分の心と、ちゃんと対話が出来ている感じになります。

その静かで落ち着いた時間というのは、とても、楽しい時間といえます。たとえ、うんうん文章を練っていても、それはとても、充実していて、楽しいわけです。

(良い書き方をすれば自分が成長する)

そのように、自分の心と対話をしながら、文章を書いていくと、自分が成長します。

考え方が、ちゃんとしてきます。しっかりしてきます。なぜなら、自分は優秀な作者でもありますが、自分は優秀な読者でもありますから、「ん？ これはおかしいなあ」とか「変だなあ」と分かってくるからです。

これは、頭の中だけで考えていたのではなかなか起こってこなかった感じだろうと思います。

一行書いて、一行読み直す。また、一行書いて、一行読み直す。

今度は、三行書いて、三行読み直す。そのようにして全部書いたら、今度は、全部を読み直す。

そして、あちこち手直しをして、また、読み返す。

文章も良くなっていきますが、それは、自分の考えも進歩、成長しているということです。

さらに書いていくうちに問題の深奥に迫って、新たな発見をすることもしばしばです。

「ああ、なるほど、では、こういうことだったんだ。ああ、すごい。大発見だ。私は本当はこう思っていたんだ」などということもありますし、「あの人のあの言葉は、本心はこうだったのだなあ。今まで気がつかなかったなあ。申し訳ないことをしたなあ」とかになるかもしれません。どのような発見があっても、人生は味わい深くなります。人生がもっともっと好きになると思います。

ですから、良い読み手である自分を発揮しながら書くと、自分もどんどん成長するということになります。そして、ほとんどの人は、誰でも間違いなく、もともととても良い読み手です。

【103】 原稿作成 (原稿用紙・ワープロ)

いよいよ原稿を書くとなると、原稿用紙に書くのか、ワープロ、パソコンで書くのかということになります。短い場合は、最近ではケータイで打ち込む事も可能でしょうね。

まず、原稿用紙ですが、これは、だいたい400字詰め縦書きです。大きい升目のものとか、小さいものとか、紙質もいろいろあり、種類も豊富です。

手書きが得意な人は、原稿用紙に書くのも良いと思います。

原稿用紙の前に座って、鉛筆、または、ペンを持つと、確かに、「さあ。書くぞ」と言う気持ちになりますね。いいものです。

私もずっと昔は、原稿用紙に書いたこともありましたが、書き直しとかが大変で、それにあまり、字がうまくないので、その後は、ワープロ、パソコンと進んでいますね。今は、原稿用紙は全然

使っていません。

出版界でも、原稿用紙派の人は、少数になっているようですね。
その理由は、パソコンの方が、やはり、データのやりとりや保管が楽ですし、挿入や訂正も楽ですからね。

ただ、キーボードで打ち込むのが最初はなかなかスピーディに行かないという難点がありますが、それさえ乗り越えれば、パソコン派の方がいろいろとメリットは多いと思います。

(縦書き横書き)

ただ、パソコンは、普通横書きで書いていきますし、本になるときは、ほとんど縦書きですから、その辺りの感覚がちょっと掴みにくいですね。やはり、日本語は、縦書きの方が読みやすいと思いますが、どうでしょう。

私は、執筆するときは、まず横書きでパソコンに打ち込み、推敲するときは、紙に縦書きに印刷します。その印刷された原稿に、赤ペンであれこれ考えながら推敲することが多いです。

また、縦横のことを言えば、パソコンで執筆する場合は、算用数字と漢数字の使い分けなども気にしなければなりません。

(パソコンでの校正チェック)

原稿用紙に書いたものを、推敲したり、校正したりする場合は、普通、赤鉛筆、赤ペンを使用して、書いていきます。これは、校正の後がはっきり記録されますから、「あっ、やっぱり、前の言い回しの方が良かった」と思えば、すぐに、また、元に戻せます。

しかし、パソコンの画面で校正すると、前の文章を置き換えてしまいますから、「あれ、さっきの方が良かったかな」と思っても、もし、その文章を忘れてしまうと、もう、もとの文章に戻せなくなってしまいます。とても、残念な気持ちになります。

そこで、私は、校正や訂正は、原則として、プリントアウトした紙の上ですることになっているわけですが、その方が、しっかり全体を見て校正できますし、また、元に戻すのも簡単ですからね。

しかし、そうするのが面倒な場合は、パソコンで、ファイルを「更新」して、古いファイルを残して、新しいファイルの方を校正することになっています。バージョンを順次あげていくと言ってもいいですね。

そのようにしておくと、紙で作業したのと同じように、訂正前の言い回しも古いバージョンに残っているので、いつでも、それを参照できるので便利です。

良い文章が思いつかないのは、別にもったいないとか、悔しいとかは思いませんが、一旦打ち込んだものが、消えたりすると、また、同じ文章を思い出そうとしてもほとんど無理ですね。どうしても、まったく同じものは思い出せません。そうすると、とても残念な気持ちになります。なんだか、大切なセンテンスが、宇宙の彼方遠くに永遠に飛んで行ったくらいの、「ああ、もう取り戻せない」というくらいの切ない気分になります。

とにかく、パソコンはいろいろ便利なのですが、しかし、間違ってファイルを削除したり、パソコンが故障したりすると、一気にすべての作品が無くなってしまいますから、危険と言えば危険このうえないですね。

原稿用紙に書いたものの全部を、消しゴムで消そうとすると、結構労力が必要ですが、パソコンに書いたものを消すのは一瞬ですからね。

「あっ」と思ったら何時間も書いて書いていた労作が綺麗さっぱり消えてしまうということもあります。ですから、こまめにバックアップコピーを作った方がいいですね。それも、パソコン本体ではなく、別のフロッピーディスクとか、ハードディスクとかの媒体に書き込んだ方が良いでしょう。

【104】 辞書の使い方

(国語辞典)

国語辞典が手近にあると便利です。言葉の意味だけでなく、地理や歴史についても簡単な説明が載っていますから、重宝します。ただ、最近は、インターネットで何かを調べるとすぐにたくさん詳しい情報を得ることができますので、昔ほど、国語辞典に頼ることは無くなってきたようにも思いますが、しかし、ものを書くと言う作業の場には、国語辞典は必須でしょうね。

(漢和辞典)

漢字の意味を調べたりするときに使うものですが、ものを書く場合は、余り必要ないかもしれませんがね。特にパソコンなどで書く場合は、使ってるソフトにもよりますが、漢字変換などしてくれますので、正確な漢字を書けなくても、書いた気になったりします。

(広辞苑)

広辞苑というのは、固有名詞ですが、日本で一番大きな一般的な辞書ですから、ものを書く場合は、この辞書に沿って書くことが多いですね。

広辞苑に載っている使い方をしているのなら、間違いではないが、広辞苑に載っていない使い方をしている場合は、間違いかもしれないという判断の基準になっているようです。

また、広辞苑を片端から読んでみると、結構面白いですね。というか、自分の知らないことがまだまだあるという感じで、知的興味が沸いてとても面白いです。

知識を沢山知っていることが、すなわち、良いエッセイを書けることではありませんが、時間があれば、広辞苑を読み物として読んでみるというのも、文章を書く上では、とても役に立ちますよ。

(電子辞書)

最近は、電気店とか、電子辞書のコーナーがあるくらい、普及してきました。小さくて持ち運び

に便利な上、中に入っている辞書も、国語辞典、漢和辞典、英和辞典、和英辞典、広辞苑、などなど、必要なものはほとんど入っています。これらをみんな持ち歩くことは重くてできませんが、電子辞書ならカバンに入れて持ち歩きも楽ですね。

引き方も簡単ですから、一度使い始めると、手放せませんね。最近では英語の発音が聞けるものまであります。本当に技術の進歩は目を見張るものがありますね。値段も昔に比べてずいぶん手頃になってきましたから、もし、ご興味がおありでしたら、この機会に購入されるのも良いかと思えます。

【105】 長編も最初の一行から

(長編に挑戦する場合)

物を書くのが好きなら、いつかは長編小説と思っている方も多いと思います。でも、いきなり長編小説に挑戦すると、「やっぱり、挫折しました」ということになりかねません。それは、実力はあるのだけれど、アプローチが間違っているためですね。長編小説といえども、スタートは最初の一行から始まります。そして、原稿用紙一枚を埋めて、次の原稿用紙を埋めて、そして次という作業の繰り返しです。

エッセイは、原稿用紙にして、3～4枚で短いのですが、しかし、作業は長編小説もエッセイも一緒です。とにかく先に書き進むという作業です。原稿用紙3～4枚書くことができるのであれば、その作業を、積み重ねていけば、たとえば1000枚を書くのも可能です。

ですから、将来長編を挫折しないように、書こうと思っている人も、まずは、エッセイを書いてみることをお勧めします。3～4枚スピーディに書けるようになったら、もはや1000枚もすぐの届くところにあります。

(1000文字の文章が書ければ長編も書ける)

つまり、エッセイを書くことは、基本的な文章力をつけるのにとっても良い練習になるということです。文章を書く力が効率よく培われていきます。では、200文字程度でもその力をつけていくことができるのかといえば、それは少し違います。文学に繋がるには、200文字では、短すぎます。歌や詩なら話はべつですけど、文章、特に散文を書くことにならないみたいですね。ですから、すくなくとも、原稿用紙、3枚くらいの分量が、文章力を上げるためには、必要になってくるような気がします。つまり、文字数にして1000文字くらいでしょうか。ですから、原稿用紙にして、3～4枚が、文章力を高めるのに、もっとも適しているのではないかと思っております。そしてそれらが集まれば長編にもなるということです。

【106】 タイトルのつけ方

(結論が先に見える場合の良否)

タイトルとはエッセイの題名ですが、これも中の文章に劣らず大切なものです。副題もタイトルです。先にタイトルを決めて、文章を書いていく方法もありますし、文章を書き終わってから、タイトルを決める場合もあります。

私は、先にタイトルを決めておいてから書き始める方が多いですね。そして書き終わったら、もう一度タイトルを見直すわけですが、そうすると、最初のタイトルとは別のタイトルになる場合も多いです。

きっと、書き進んでいくうちに、タイトルとは違うところがポイントになったり、新しい観点がでてきたりするからでしょうね。

また、言いたい結論をタイトルにして書き始めて、書き終わってから新たにタイトルを見直すと、それでは本文を読み進む興味がそがれると思ってタイトルを変えることもあります。あまりに、内容そのものズバリの題名がついていると、読んでも面白みがない場合もありますから。

(疑問形ではじまるタイトル)

「どうして、何々なのだろう」とか疑問形でタイトルをつける場合もありますね。疑問形は、「頭」にとってはとても興味を引く形ですから、疑問形でタイトルをつけるのは、注意を引き易くて良い場合もあります。また、疑問形でタイトルをつけると、結論は、その疑問に答える形ですから、話の流れはとてもわかりやすいですね。

ただ、そうするとちょっとレポートのようになりやすいのが欠点でしょうか。あと、どうしても理論や推論が幅をきかしますから、しみじみとした情緒とかを伝えにくくなりますね。しかし、伝えたい内容によっては、疑問形のタイトルは強力であることは間違いないですね。

(内容の要約と一ひねり)

内容をよく要約してあれば良いタイトルかといえば、そうともいえません。エッセイの中にでてくる、象徴的な物や言葉の方が、良い場合もあります。情景や、物でも、それに、形容句がつけば、すぐに良いタイトルになります。

例えば「雲」だけでもエッセイは書けますが、「夏の雲」とすると少し状況がわかりますし「あの時の夏の雲」と言えば、どんなときなのだろうと気をひかれますね。「君と見たあのときの夏の雲」と言えば、どんな人と何を感じながら見たのだろうと思います。イメージを膨らませることがたいせつです。

でも、「君と見たあのときの夏の雲は、白く輝いて眩しかった」などと、長い文章にしてしまっただけは、やり過ぎです。ちょっと興ざめになってしまいますね。タイトルは本文を読みたくなるよう

な、どちらかという、ちょっと言葉足らずの方が良いようです。長からず、短からず、ちょっと一ひねりしてみてください。

読む人は「良いタイトルをつけられる人の文章もきっと面白いのだろう」と類推しますし、また、書く方も良いタイトルをつける練習は、良い文章を書く練習と同じことですから、しっかり、考えて良いタイトルをつけてください。

【107】 自分の言葉で書く

(話し言葉と書き言葉)

自分のことをかくのですから、自分の言葉で書かなければ意味がありません。誰々がこのことをこのように言っていた。私もそう思うというのでは、紹介文になってしまいます。なるべく自分の考えや感情を自分の言葉で書くということの練習は、まずは、話し言葉で書いてみる方が分かりやすいと思います。

書き言葉は、書き言葉で使い方によっては正確に論理的に物事を説明できたり、考えを整理できたりしますので、それはそれで便利なのですが、書き言葉の弱点は、感情を上手に表すのが容易でないということです。

「私は悲嘆にくれた」でも「私、泣きたい気持ちで震えた」でも内容は同じかもしれませんが、話し言葉の方が、やはり、表現が細かいですし、迫力があります。

「彼は頑固だ」ではなく、「彼は言い出したら聞かない」とか。普段会話で使っている言葉を使う方が、自分の言いたいことがちゃんとと言えると思います。もちろん、普段の言い方が、「彼は、頑固である」というのなら、その方を優先しましょう。

とにかく、使い慣れたことばを綴るということです。その方が表現が豊富になりますし、相手にも伝わり易いです。

その上、文法や語法的に間違ふことがありません。なぜなら、自分が現在使っていることばは、たとえ、広辞苑にその使用例がのっていないなくても、話して伝わると言うことは、それはれっきとした現代の日本語ですから、使い方が正しくないとは誰も言えないわけです。

ですから、安心して書きたいようかけます。まずは、話し言葉でかくというのをやってみてください。

その意味から言うと、方言で書いてもちっともかまわないのだろうと思います。それはそれで面白いと思います。ただ、その方言が分からない人は読んでもわからないですから、それなりの工夫やフォローが必要ですけど。

(みんなに向かってかくのではなく、誰かに向かって書く)

書き方のスタンスとして、世間一般に読んでもらおうと思って書くとなかなか書きにくいですし、文章も散漫な感じになります。それは、平均点を取ろうとすると、個性がなくなるようなもので

す。

そうではなくて、個性を発揮するには、誰か特定の人を読者に想定して書き進めるのが良いテクニックです。手紙なら、相手が特定されますが、エッセイは不特定多数の人が読者になりますので、勢い、あちこちに気を配ったものになりがちですが、それが行き過ぎると面白いエッセイも面白くなくなります。ですから、顔の思い浮かぶ人、誰かを想定して書き進んでみてください。

これはちょっとしたワザですが、きっと、とても書きやすい上に、文章も分かり易く親切な良い文章になると思います。

また、エッセイの中には、女性向けのエッセイ、子供向けのエッセイ、独身男性向けなど、さまざまなジャンルがあります。このテキストでは、特定の読者を想定した課題はありませんが、実際には、狭い範囲の読者を想定したエッセイは多くの需要があります。

相手を想定すると、言い回しや、表現方法、使用単語まで、いろいろと統一されてきます。その統一感はどうしても必要なことだろうと思います。ですから、今回の課題では、是非、誰か特定の人を読者に想定して作品を書いてみてください。

たとえば、「山田さま、ごぶさたしています。お元気ですか。実は先日、デパートで、変なものを買ってしまいました。それが・・・」と書き始めて、あとで、特定の相手の部分を削除して調整してみてもいいです。このような書き出しをすると誰に何を話そうとしているのか、自分でも明確ですから、読む人もはっきり趣旨がわかります。特定の人をイメージするひとつの工夫として覚えて置いてください。

【108】 他人のことはあれこれ言わない

(紹介文とエッセイとの違い)

紹介文は、主体が誰かの紹介になります。エッセイは、自分のことを自分で紹介するわけです。自己紹介のようなものです。もちろん、自分が出る割合はそのエッセイ、エッセイによって異なりますが、しかし、自分がどこかに出てくることに意味があるのです。

そのエッセイに他人を登場させて、誉めるか、貶すか、評価するか、評価しないか、好きか、嫌いかなど、自分の気持ちを投入しても、あまり、面白くありません。では面白くないからといって、もし、それらの自分の考えや感じかたをまったく書かなかつたら例えば、「義仲はそこで、馬から下りた」みたいに、なってしまって、エッセイとは別のものになってしまう。

ですから、他人のことをアレコレ言うのは良くないからと、何も言わないのはエッセイではないということです。

では、もとに戻って、アレコレ言った方がいいのかということですが、「戦略のない義仲は、まったく戦いの意味がわかっていなかったから、そこで、愚かにも馬から降りてしまった」のように書けば、それは、作者が義仲は愚かだと思っているということがわかりますから、まあ、作者の考えが分かるといえばそうです。

しかし、それはやはりエッセイではないですね。他人の批判はエッセイではないです。自分が生身で前面に出てこなければ、面白くありません。書き手が安全難ところに引っ込んでいては、つまらないということです。

「私が彼女と別れたのは、義仲が馬から降りたみたいに、戦いの意味がわかっていなかったのだと、今になれば、納得できます」くらいに「自分」が前面に出てきたほうが良いのです。

(アピールするのは自分)

表現するのは自分です。自分の素晴らしさでもいいですし、自分の愚かさでもいいですし、自分の面白さでも、面白くなさでもいいです。自分の何でもいいですが、とにかく、本当の自分が出てこなければ面白くありません。こんなことを書くと恥ずかしいから書かないようにしようとか、こんなことを書くと馬鹿にされるから、格好良く書こうとかの気持ちがあるのは当然ですが、その気持ちに沿って書くと良いものは書けません。

格好悪ければ、どう格好悪いのかそれを書きましょう。駄目な自分があるなら、どう、駄目な自分があるのかそれを書いてみましょう。

自己分析的にできているようなら、駄目な自分を書いても、作者を駄目だとは誰も思わないでしょう。

わざわざ格好悪いところを探して書き出すこともないですが、飾ったり見栄をはったりは、少なくともしないようにしましょう。

ありのままの自分をありのままに書くというのが王道です。
一番簡単そうで、一番難しい道でもあります。

【109】 一文の長さの問題

(読点から読点までの長さ)

文章の長さの問題。短いほうが良いのか、長いほうが良いのか。どちらが良いと一概にはいえませんが、長い文章ばかりが続くと、読むときに息が切れて辛いですし、逆に短い文章ばかりが続くと、読みづらいつい言うのもあります。長短取り混ぜてあるのがいいのでしょうか。

また、長い文章だと、ゆっくりになって、短い文章だと、テンポが速くなりそうですが、逆になる場合もあります。内容や使用する語句によりますね。

一般的に、一文の長さを平均して言うと、
社説は、41文字
教科書は、26文字
雑誌は、29文字だそうです。

エッセイは、そうすると、平均すると30文字前後ということになりますでしょうか。
これはもう一度いいますが、平均ですから、長いものもあって良いわけですし、短いものもあってよいわけです。

(段落との関係)

段落というのは、改行して一行空けるのが一般的です。空けない場合もあります。

考えや、状況の変わり目で段落を設けて、話を変えるのが普通です。

原稿用紙ですと、一行空けると、20文字の空白になります。

パソコンデータですと、横40文字のファイルでは、段落を変えると、40文字の空白になります。

すると、何文字以内という表現で字数を制限された場合、空白行の計算の仕方で、字数が異なってきます。

雑誌のコラムなどで、本当にギリギリのスペースしかなくて、字数が限定されている場合は、たとえば「17文字の45行」とかの、厳密な指定があつたりしますが、大概は、おおよその文字数で行っています。

ですから、1200文字以内という場合は、改行や段落を考えれば、だいたい実質の文字数は、1000文字くらいでおさめておけば大丈夫です。そうすれば、段落が3～4あつても、改行した「。」の下の余白も含めて、升目の数から言えば、1200文字におさまります。

言いたいことがたくさんあるからと、改行や段落を省略して、密度を高くして文を詰めて作成するのは感心しません。言い方を工夫したりして、改行や段落を十分とれるように、短くする方が良いでしょう。

雑誌など、字数をオーバーした原稿を渡すと、必ず、どこか削って短くしてほしいと言われますが、少し短めのもは、何も言われません。それで、言いたいことが言えているのであれば、余ったスペースはちょっとした挿絵なども入れられますから、その方が編集の方は楽なようです。ちょっと短めに書く。そしてやってみるとわかりますが、短くする方が長くする方より「頭」を使います。

以上で、一回目のテキストを終わります。

(第1回目の課題) は、「心があたたかくなったこと」 (800字以内) です。
(「自由課題」でも受け付けております。)

それでは、第一回目の作品を楽しみにお待ちしております。

宝彩有菜

宝彩有菜の「エッセイ講座」のHP

<http://homepage3.nifty.com/hosai-pj/essay/memb-index.htm>

(C) All copyrights reserved Alina Hosai 2005